

おおやまと

大倭出版局・大倭紫陽花邑

平成30(2018)年
2月号
通巻570号
毎月23日発行
(題字 矢追日聖)

★発行日 平成30年2月23日
★発行所 大倭出版局
〒631-0042 奈良市大倭町1の12
☎(0742)44-0015
★印刷 大倭印刷 監修
★定価 1部 250円
年間購読料3,000円(送料共)
★郵便振替 01050-6-67002
大倭出版局
URL <http://www.ohyamato.jp>



沖縄県北谷(ちやたん)の海岸風景 神奈川県横浜市 加藤晴美さん撮影(文・3頁)

再録 昭和42(1967)年10月23日発行『すさのお』第13号より

手をむすびあう宗教の場を — 座談会(上)

法主様を囲んで瑞光院にて

法主 矢追日聖(満55歳)

出席者

西辻誠二
合田佳三郎

戸田忠好
柴地則之

司会

編集部(平谷照子)

編集部 お忙しいところをわざわざお越しいただいてすみません。堅くなる話ではなしに、ただ、興ののるままに、やわらかくお話し願えたらと思います。
始めに大倭へ来られた時のことなどお話しただけでしたら。

大倭見たまま

西辻 そうですなあ、大倭へ来たのはやっぱり山岸会の関係です。ダンちゃん(柴地則之さん)ですわ、わしをここへつれて来てくれたのは、あれは、春やっただかな、三月やっただかな。花見に行こうかと思っただけな。花見に行こうかと思っただけな。

柴地 僕が(大倭一門に)入る前です。
編集部 その時に、合田さんも一緒に来たか。

西辻 いや、始めは、わしと家内とだけですよ。

編集部 その時の感じなんですけれど、法主さんにお逢いになった時のことなど、思い出してお話し下さったと思います。

西辻 はっきりと覚えてはないが、ええ感じでした(笑)。とにかく、ほんわりとした感じで、その感じは今だに少しも変わらへんですな。やっぱりここへ来る

と、きゅうつとなつてるのがほぐされるという感じが、いつまでたつても変わりませぬね。

大倭どうや、と聞かれたら、人にも言うのやが、「大倭へ行きなはれ」とな。「そんなら、どうよろしいのや」と言われたら、「一言で言えば肩のこりがとれます。そう、ストレス解消できてよろしいで」、まあそういうことすな。

そうかというて、法主さんにお逢いして神道のこと、くわしゅうに聞いたというでもなし、わしの言いたいことを大分熱あげて言うつもりだな。それでいい気分になつて帰つてもうた。まあ、そんなとこです。

法主 そうやったな。

編集部 合田さんは、どのくらいあとから来られましたか。それでこのことをどうお感じになりましたでしょうか？

合田 一ヶ月か二ヶ月あとになりますかな。見れば法主さんはひげをはやしておられるので、こわいように見えました(笑)。しかし、だんだん話しているうちに気楽になりました。それに邑全体を見ると、山岸会の一体生活の理論が、部分的にここで実施されているように思いましたね。実際に、そういう楽しい社会があると思えました。こまごまと言われたら、どう言っていいたか。

戸田 まあ、未知の人とでも一つの生活をしながら労働に従事しつつ、人間的なつながりをもっていく。普通の場合なら、すぐに争いの起こるところが、どうにかスムーズにいつている。そんなところが魅力だったわけすな、最初。

勿論、内容的にどこまでということとはわからんですがね。しかし、大体うまくいつてるんだなという感じは受けました。その点、山岸会の方は事実にそこまでいつていませんでした。

合田 それにもう一つ、一番感銘を受けたのは、

法主さんが「教える」という形でなしに、自ら率先してやつておられるというその愛情というか、そういうところすな。加えて、誰とでも気楽に話せるところなんかも。手取屋(外次)さんなんかは、ほんといつて見つけた言うて喜んでい

た。(※山岸会を出た後、邑人となり帰幽)
西辻 ああ、喜んでたな。あの人はここへ来て成仏できたんやと思う。

編集部 今日も来ておられるかも知れませぬね。
法主 そりゃあ、来ているよ、あれは通達無碍(通達して自由自在であること。法華経から)やからね(笑)、直ぐ来るよ。

西辻 それはな、わしも最初はどうかかなあと思つて来たところもあるんやで。まあ我々として一番思うのは、世間の宗教というと、大抵、宗教企業家が多いですわ。それやないかなあぐらに思つて来たんです。

しかし来てみたら、ここは金属プレスとコンクリートブロックをやつておられたなあ。事業をやつておられる宗教家やつたらええわと思つてな。

合田 それに信者つくらんいうこともね(笑)。

西辻 そう、そう。それでここへ来たたら、いつも深いことは何も聞かんと、ただ、法主さんといつて話してホーとなつて帰つてしまふ。何ということなしにそういうところが好きすなあ、すつきりしてて。

何というか信者の顔色ばかり見て、銭の沢山あげた者を直ぐに位を上にしてな、あんなことするのきらいやあ(笑)。それやから、よそから何やかや言うて、ひっぱりに来られてもよう行かん。

最後はどこでもそれや。金や権力や口のうまいこと立つ者がうまいことをする、そういうのはいやですわ。本質からはずれているように思いますな。そんな点で清純なものがあるなあ、最初に感

じました。

法主 そが今日の本論やなあ(笑)。

柴地 法主さん、これについてお聞きしたい。その場合にすね、いわゆる宗教という名を出しますと、かえつて誤解をまねく面が多くありますね。宗教に理解を持つておられる人は、ああそうですか、宗教に関心をお持ちですかということになるのですが、宗教に無理解な人には宗教とりわけ新興宗教を言いますと、何かいかさま師の仲間の人みたいに思われることがあるんですね。

外へ出た時に、それでもあえて宗教として、別の名を出さずに、大倭教としていかれるその名の出し方、それについてお聞きしたいのですが。

嫌われる宗教であっても

法主 それでいいのところがいますか。宗教という言葉は聞いただけでいやがる人がある。それだからといって、こちらも世間の宗教屋と一緒に誤解されたら困るから、そこから逃げようとするのは卑怯やからね。一般の人がそうだから自分もそこから逃げるといふ、弱気やとられがあつた場合、ほんとの宗教はやつていけないと思つて。

世間がいかさまでも、こちらがそのいかさまと同じ恰好をしていて、いかさまでない事実を出していくことが、かえつて宗教改革になるのところがあと思つてね。

まあ大倭という名称は霊界からの指示で、「教」をつけたのはこちらの勝手なんで、だから、大倭だけでもいいわけですがね。

しかし、世間では何々教というように、神道関係は「教」をつけておるんで、その同じ恰好で出ていつて、仲間の内から浄化していく。それも一つの方法すね。これは人間の考えた方法だけ

ど、だから自分はそこから逃げようとはしないんです。

ところが、おもしろいのですよ。この間もこへ来た人が、大倭はもつと信者をつくるべきだと言っただけです。しかし私は信者は一人もいらんと言ったところ、信者が一人もいらんでは宗教団体は成り立たんと言われたんです。それじゃ、一体、何でやっておられるのか、とね。

そこで、信者というのと、一方に大先生とか師匠とか、教祖さんとかの一つの対象があつて、その人達についてゆく側の方を信者と言っているわけですね。いわば相対的になりますね。信者ははいつくばって手を合わせ、そこでその教祖さんとか先生から何かの力を借りて、いわゆる神さん仏さんの仲介業者になつてもらつて、我が自身が利益を得ようとする。そういう形の信者でしたら一人もなくてもよいと言つておられます。

わしが言うのは、信者というんじやなしに、自分たちと同じ仲間、つまり先生や信者というものでなしに、平たく言えば、先輩とか後輩とか、そういう身近な仲間、いわゆる同胞なんです。泣く時は一緒に泣き、喜ぶ時は一緒に喜ぶという苦楽を共にすることのできるもの、まあ仏教で言えば一連託生ですわね。そういう仲間であれば、何十万人おろすが、何百万おつても結構です。

ところが信者が何十万もおつて、それを引きつりまわそうと思つたら、こつちがえらいし、しんどいし、逃げよつたらかなわんし(笑)、それで、わしは信者なんか一人もいらんと言つたわけですね。自分もこれまで三十何年この道一本できていますが、宗祖の釈尊であるとか、キリストであるとか、それらの人の説かれたものを、そのまま受けつぐのが帰依する人の態度であるべき筈ですが、時代の流れによつて、その仲間の一つの組織がで

きてくる、宗派ができてくる、教会ができる、お寺ができる。そうなつてくるうちに、最初の仏さんの根本精神というものが非常にゆがめられてきたんですね。

今のお寺とか坊さんを見てそれが正しい仏教だと思つたら大間違いで、それじゃ、何故それがゆがめられてきたかということになると、大抵、お寺であろうが、坊さんであろうが、お宮さんの神主であろうが、職業として生活がかかつてきているんですね。そういうように生活がかかつてくると、意志があろうとなかろうと、やはり生活の方が重点的に考えられるから、どうしてもゆがめられてくるのかも知れません。

しかし、自分の場合は宗教に生活がかかつていません。が、寄つてくる人は何かの形で救いを求めて来るのだから、たとえばお祭り一つにせよ、できるだけ相手の人に負担をかけぬよう、まあ、祭典行事にしても安くあがるようにね(笑)。向こうはみな生活がかかつているのだからね。

それだけに自分としては、自分の思っている範囲においては、正直に宗教的な行き方ができると思っているんです。それで、こうして周囲に事業を持つということになるわけですが、宗教でもって「めし」を食うということになれば、おっしゃるように金を持つてきてくれる者は位でも上げるとか、寄付をよけいにしてくれる者は奥座敷へ通して絹の座ぶとんでも出さずとか、持つてこん者は玄関で話をして帰らすとか、しなくてはならない。世間で見るとなそうしたこと、生活がかかれればこそでしょうな。

西辻 そりあ、そうです。

法主 と、いうことだと思つてますがね。柴地 で、西辻さんはですね、いろんな宗教を知つておられますし、最近、新興宗教などものびて

きておりますが、そういう全体的な状態を眺められて、宗教にかけられる期待みたいなものをお聞かせ願いたいと思います。

西辻 あまり期待かけていません(笑)。

柴地 今の姿をどういうように感じていられますか。

西辻 あればあれで、やっぱり何んぼかの人が救われているかどうかは、その人に聞いてみんとわからんが、それでも、何んぼかの人があれによつて、一応安心らしきものを得てやつておられたら、それでよいと思います。

法主 それは、そうです。

西辻 そこから、どうなつていくかということはいわゆるわかんないが……。

柴地 宗教という響きに対してはどうですか。

西辻 宗教という言葉ですが、そうですね、宗教と言つたかて、いいように思いますな。

柴地 そういう言葉お好きですか。

西辻 宗教という言葉は、好きでもきらいでもないですな。(続く)

※再録に当たり常用漢字を使い、送り仮名も現代的にし、文章も若干推敲しました。

昭四十二・九・二七 文責・編集部

神奈川県横浜市 加藤 晴 美

私は沖繩の美しい風景や文化に触れたいと思

い、三線(サンシン)やヨガを学び、写真教室にも通つていました。この写真は写真仲間と沖繩の中部にある北谷の海岸で撮影したものです。近くには嘉手納基地があり、米軍機やオスプレイが轟音を響かせて飛んでいました。戦争とは無縁な豊かな沖繩を破壊する基地に、反対する沖繩の人々の願いを大切にしたいと思つていました。

あじさいアルバム 18

昭和63年7月1日～4日
津軽への3人の旅
長慶天皇の御陵へ



④ 7月2日



① 7月2日



③ 7月2日



⑤ 7月3日



② 7月2日



⑥ 7月4日



⑧ 7月4日



⑦ 7月4日



⑨ 7月4日

法主様による写真説明

- ① 7月1日京都発午後8時56分、日本海3号にて。(翌朝の柴地則之さん)
- ② (タクシーで)中津軽郡相馬村へ走る。岩木山。父と来た時は馬車だった。……青森ではここを走っても岩木山がつきまといて見える。
- ③ 長慶天皇御陵墓入口にて……御陵まで登らなかつた。左から柴地、法主、鈴月。翌平成元年9月24日則之は他界する。この旅の一枚の写真毎に故人を偲ぶ涙がある。
- ④ 十三湖畔。神明宮、長髓彦を祀る、石器時代の遺跡(於瀨洞)。

平成6年5月26日～6月24日
東北への旅

▼ 5月30日、長慶天皇御陵墓参考地にて。左から高橋延之さん、須藤稔さん、荒井雪実さん、法主様(故柴地さんが一緒に来ていると言われていた)、かあさん、高橋末子さん、工藤美代子さん、見田暎子さん(撮影者:高橋良美さん)



平成3年6月24日～30日
佐渡への旅



▲ 6月26日、根本寺戒壇塚(日蓮の草庵跡)にて。左から(後列)青山日元さん、法主様・平田太一くん、かあさん、見田暎子さん(前列)平田緑・弘之さん、土井里江子さん、高橋良美さん(撮影者:大滝哲也さん)

- ⑤ かつて父と泊った浅虫温泉泊。
- ⑥ 十和田湖畔、十和田神社の前を通る。龍神あり。
- ⑦ 毛越寺山門前。開基、慈覚大師。長治2年、2代基衡が万宝を尽くして造営した勅願寺。「吾妻鏡」に霊場の莊嚴吾朝無双なり、とある。中尊寺にまさる大寺だった。
- ⑧ わんこそば、名物を運ちゃんと4人で食べる。定食が25杯。
- ⑨ (一ノ関駅より帰路)……西大寺で盛賢迎えにくる。午後9時、無事に大塚へ帰る。

寸 莎

第128回

見田 暎子さん

法主さんとの旅

今回登場してもらうのは、「相棒」の高橋良美さんと紫陽花邑に住みついで23年あまりになる見田暎子さんである。その取材に先立つて見田さんは、法主様との出会いや2度の旅について入念で心のこもったメモを作成して下さった。そこで、寸莎としては異例であるが、そのメモの抜粋を中心にまとめてみたい。

まずは、ごく簡単に見田さんの横顔にふれておこう。昭和15年4月16日に栃木県の足利市で生まれ、ここで幼少期を過ごした。小学4年生の時に父親が北海道大学に招かれたため札幌に移り住んだ。本人も北海道大学で社会学を学び、非行少年問題に興味を深め、後に家庭裁判所の調査官も務めた。大学1、2年の時には六〇年安保闘争の渦に入り込み、デモに明け暮れたという。



その後の結婚や子育てなどの人生の色どりにふれていると紙数が尽きてしまうので、一足飛びに法主様との出会いについて聞いてみよう。

《はじめて法主さんにお会いしたのは、昭和49年初夏、夫の社会学者・見田宗介氏が「泡沫コミュニケーション」をあいさい邑の「交流の家」を借りて行ったとき。二日目の夜、法主さんにお話を聞いて散会してから、対座して法主さんの心霊体験をお聞きした。大きな古い樹がいっぱい葉を茂らせていて、その葉をゆすりながら風がざあーと吹いてくる。その風に吹かれているのが、とても気持ちよかった。「人格」という言葉は知っていたが、人に格があるというのはこういうことかと、はじめて知った。たいへん格の高い方だった。》

その後、折にふれて大倭を訪れることになるが、昭和51年に東洋鍼灸専門学校に入学して53年に離婚。54

年に東京の八王子市で「玄德院」という治療所を同級生だった高橋さんと一緒に開院してからは、頻繁に大倭の行事に参加できたとか。

平成3年には、法主様夫妻の佐渡行きの旅の「荷物持ち」を高橋さんと共に申し出て6月24日から1週間の旅の相伴をすることになる。

《美に不思議な、心霊現象に満ちた楽しい旅だった。なかでも、佐渡を船で去る時、突然の雨の中、水面から雲まで3本の大中小の水柱が立ったのには驚いた。佐渡の龍神さんがお見送りされたそうなの。》

それから今度は、高橋さんと見田さんが平成4年9月から1年以上かけて南半球の旅をして帰国の挨拶に訪れた時、法主様が「あんたら待っていたんや」と東北の旅の予定を話されてお伴することになったのだという。平成6年5月26日から6月4日の長旅で、多賀城跡、松島、弘前、長慶天皇陵、登矢守塚、石塔山、岩木山、十三湖、龍飛岬等を訪れた。

《東北の旅の頃、私たちはアイヌの産婆さん・青木愛子ばばさんと暮らしていたので、北海道日高の二風谷から大倭までお迎えに上がった。これまた、美に不思議な楽しい旅だった。遮光器土偶のふるさと、亀ヶ岡の土を、あまりにもいとおしそうに握っては、さらさらと落とされて

いたお姿が、今も目に浮かぶ。》

見田さん達が大倭に住みつくことになった事情をこう語る。

《平成6年の晩秋、法主さんの両足が丸太のようにふくらんで病院でも治らないうちにお聞きして、お側に伺う時だと悟った。法主さんの最晩年はお側にいたい、と以前から心に堅く決めていた。12月21日に大倭に入り、双葉館を宿として、以来平成8年2月8日まで、每晚瑞光院に伺い、経絡按摩、灸、足湯等をさせていただいた。一年以上毎晩欠かさずお会い出来、最高の幸せだった。》

平成8年2月9日の法主様帰幽後も、ふとしたきっかけから、「もうしばらくここにいて、法主さんの理想と現実におつきあいしてみよう」と思い今に至ったのだという。

この春で見田さんは高橋さんと共に大倭を一度離れることになったが、その心境をこう記している。

《77歳になった今、日本中の現界・霊界の人達に、法主さんのことをお伝えしながら、法主さんと一緒に数年旅をしてみたいと思う。そして終つたら、畑仕事をしつつ大倭神宮のおそうじをしながら暮らせたら、と夢みている。》

今後は、折にふれて語り足りなかつた分を本紙に寄稿していただくつもりである。(聞き手 岸田哲)

足あと
足あと

まちに暮らしの種を蒔く

神奈川県横浜市

野本 三吉 (田谷町のおじい)

一、共に学び、共に生きる大学

ぼくら夫婦が沖繩での生活を始めたのは二〇〇二年の四月のこと。今から考えるともう十五年あまりの年月がたつてしまったことになる。

ぼくは当時60歳、晴美は56歳であった。

沖繩の中心街、那覇から少し離れた国場くにがまにある沖繩大学に勤め、アパートは大学から歩いて数分の高台で暮らし始めた。

それまでのしがらみからも解放されて、休日には沖繩の離島を訪ね歩くことも出来た。また、若い日に沖繩で神ごとをしていた比嘉ハツさん達の「ミロク会」にも加わり、各地を廻る祈りにも同行していた。

こうして五年余りの生活を経て、『海と島の思想』という本を現代書館からまとめさせてもらうことが出来た。沖繩大学の停年は65歳なので、ここまででぼくらの沖繩生活は終る予定だった。

ところが、その年は沖繩大学創立50周年の年に近づいており、沖繩大学でもそれを記念して新しい学科を創設しようということになり、二〇〇七年に「こども文化学科」を立ち上げることになった。その準備委員に選ばれたぼくは、その内容や先生方を揃えることも含め、その役割に集中することになり、結局「こども文化学科」の学科長に選任され、特任教授という名で大学に残ることになった。

子どもについて考えたり調べたりすることの好きだったぼくは、県内の方々、学生さん達と「沖繩子ども研究会」をつくり、実践家の方々と研究

家の方々

野本 三吉 (田谷町のおじい)

家の方々との研究会を続けることになり、二〇一〇年には「子どもを守る文化会議」の全国集会を沖繩で開催することになった。そして、それまでの成果をまとめて『沖繩子ども白書』（ポーターインク刊）を出版することも出来た。

新設の「こども文化学科」も順調だったので、その年、ぼくは引退するつもりで準備していたのだが、何とその年に学長選挙が行われ、やめることにしていたぼくが次の学長に選ばれてしまうという驚くべきことが起こってしまった、68歳のぼくは沖繩大学の学長として、その後三年間、沖繩に暮らすことになったのであった。

はじめでこのような責任のある仕事につき、ぼくは緊張していたと思うのだが、就任早々の六月、突発性難聴となり、突然に聞こえなくなり入院を十日ほどすることにもなった。二〇〇〇名余りの学生さん、二〇〇名余りの教職員の方々の暮らしと学びを守ることの大変さをヒシヒシと感じたのだが、同時に、学長というのは管理者ではなく、一人ひとりの方達が自由に伸びのびと学び、暮らししていくことを守るのだということも実感できるようになった。信頼しまかせ切って、その責任をとるつもりで三年間を過ぎた。

「共に学び、共につくり、共に生きる」、これがぼくの大学運営の基本になった。

こうして三年の任期が無事終了し、ぼくの後任の先生も決まり、身を引くつもりでいたところ、学長として再任されてしまうという、またまた驚きの結果が出てしまい、二期目を引き受けることになったのであった。しかし、ぼくは既に70歳を

越えており、その時、大学基準協会の査察もあって、書類づくりや面接などで目の廻るような日々となり、その査察が終わって合格の通知をもらったとたんに倒れてしまい、入院。

諸々の検査の結果、大学の仕事はやめた方がよいという診断書を書いていただき、卒業式終了後の、二〇一四年三月末でぼくは沖繩大学を退職することになったのだった。

この時、ぼくは72歳、晴美は68歳になっていた。大学には十二年の間、お世話になったことになる。不思議な縁が沖繩にはあったのだなアとあらためて思い返している。

二、子どもと共に生きる島

もともと沖繩大学の仕事が終ったら、沖繩の離島で一年ほどユックリ暮らしたいと思っていたので、すぐ横浜に戻るつもりはなかったのだが、長く続けてきた「子ども研究会」の整理と引き継ぎ作業もあり、借りていた家の半分を返し、一問だけ暮らせるようにして、大学から近い南風原町の借家でしばらく暮らすことになった。

この時期、沖繩では日本政府による一方的な抑圧と差別の中で、基地新設が進められることになり、沖繩全体がまとまらなければならぬという運動が起こり、島ぐるみ活動が地鳴りのようにわき起こっていた。

そして、沖繩県知事選挙では、これまでの保革の対立でなく、県民が一つになって沖繩の自立と平和を守る力を結集し、翁長知事が誕生するという歴史的な動きの時を迎えていた。この時の県民統一候補、翁長知事の公約は、県民との話し合いの中で大きく三つに集約されていた。

一つは、平和と安全な沖繩をつくること。そのため

は安定した生活をつくるため、経済的な発展を進めること。そして三つ目は、次世代を担う子ども達の生活と成長を守るための子育て政策を実現することであった。

この頃、子どもの貧困状況が厳しくなってきたことに気付き、政府も「子ども貧困対策法」を作成し、各地での取り組みをすることが決定された。沖縄県では県知事を中心に議会も含め、まず沖縄の子ども達の生活実態を調査し、その結果に基づいて対策をたてることが決定し、子どもの貧困実態調査を行う事業体の募集が始まった。

そこで、「子ども研究会」の後に結成された「沖縄県子ども総合研究所」が応募し、審査の結果、ぼくも参加しているこの小さな団体が、調査を引き受けることになった。

それからは、実際に県の担当課との調整と、子どもの貧困に関する全国の研究者との交渉、依頼、調整など、これも目の廻るような状況になった。ようやく全体の見通しがつき、二〇一五年には、小学生・中学生とその保護者への調査、そして二〇一六年には高校生の調査が行われ、その結果報告と分析が出来上がった。その調査をかもがわ出版でまとめてくれ、二〇一七年十月に『沖縄子どもの貧困白書』が出版されたところである。

全国の子どもの貧困調査の結果から、二〇一二年には16・3%と出され、二〇一七年には13・9パーセントと改善されたと報告されているが、二〇一五年の調査で、沖縄では全国の二倍となる、29・9%となっていることが判明したのである。沖縄の子ども達の三人に一人が相対的貧困に陥っていることが明らかにされたのである。沖縄県はこの結果を受けて、次々と対策を立て、実行に移してくれている。離島も含め、各地に「子どもの居場所」をつくり、子どもや家族が安心して出

かけ、相談ができ、食事や学習の不安がないように「子ども食堂」や「無料学習室」をつくり、その数は既に百ヶ所を越えている。

また、子ども支援員も研修を含めて各地に誕生し活動を始めている。進学するための奨学金の創設や、市町村、自治会などの実践も始まっている。

こうした実践も含め、今回の『沖縄子どもの貧困白書』には載せたのだが、今年の二月二日で沖縄を中心に三刷となった。先日、ぼくはその印刷の一部を県に寄贈するために沖縄へ伺ったのだが、この調査と実践、政策への流れができ始め、ホッとしているところである。

沖縄での取り組みは一つのモデルであり、全国各地で参考にしてほしいと願っている。

三、地域ごと、生きる現場

沖縄との関わりはこのような形で今も続いているのだが、ぼくらが沖縄から横浜の自宅に戻ってきたのは二〇一六年六月のこと。家の中には荷物がたくさんあり、その整理は本当に大変だった。まだ片付けきつてはいない。

そんな中、ぼくらが住んでいる田谷町の老人クラブ「長生会」に参加した。

沖縄で学んだことの最大のもは、暮らしていく場所は地域であり、そこで一緒に暮らしていく人が互いに助け合い支え合って生きていくことが最も基本であるという確信であった。その背景には、いくら国に頼んでも支えてくれない、頼りにならないという思いがあるからなのだが、子どもの教育も、医療も食料も消防活動もみな、地域の人達が共同でやってきたという歴史がある。

地域には「寺子屋」があり、小さな「雑貨屋」があり、田畑があり、山や川もあった。そして薬草を大事にし、何かあれば近隣の人々

が集まり、家の修理をしたり、道や橋も直してきた。村の寄り合いでは何度も何度も話し合い、納得できたことは、村中で力を合わせやりきってきたのであった。

現在では、暮らす場と働く場が分離して、家庭や地域でやっていたことを次々と外部化し、サービスを提供してもらうようになってしまった。

生活の細々したものまで、行政や企業のサービスに頼るようになり、隣り同士のつながりも切れてしまっている。何とか、その地域の絆を取り戻し、地域の中で、暮らしている人々の力を合わせて生きていき、安心できるスタイルを取り戻したい。

昨年(二〇一七年)の老人クラブの総会で、ぼくは田谷町長生会の会長に選ばれた。

毎月二回の定例会は、集まった人々の交流会となり、一緒に歌ったり、散歩したり、軽い体操などをしているのだが、最大のは会報『笑顔・楽しく』を復刊したことである。毎号、写真入りの記事が載り、地域の方々の「人物誌」が載るようになった。始めは恥ずかしがっていたのだが、お互いの人生や思いが伝わり合い、つながりが深くなったなアと感じている。これまで12号まで発行したので、今年の総会には合併号をつくり配布するつもりでいる。

先日は、地元の小学生と一緒に給食会をしてつながった。また近くの老人ホームとの交流や、民生委員さん、福祉の方々との話し合いもした。

ぼくは今、この地で生き死んでいくと実感しているのだが、この暮らしの中から、ぼくらの本来の生き方が戻ってくるようにしたいと思っている。地域に暮らす子どもと年寄り、そして小さな商店や自然との共存、それがぼくらのこれからの「故郷づくり」の旅になると思っている。

※野本三吉・本名、加藤彰彦

あじさい日誌

ボランティアグループ 「あじさいの箱」 第35回懇親会



平成30年3月17日(土) 11時~14時
 ■大倭会館にて
 ■会費：1500円(昼食代)
 (昼食要予約 且田 0595-68-4108まで)
 *大倭安宿苑常務理事・矢追明昌さんのお話
 *活動報告他

1月12日 中村俊哉さん(千久佐さんの夫・元大倭印刷社員)が帰幽されました(享年65歳)。
 1月13日 午後4時からならパークホテルで邑交会新年会。
 1月14日 祝会。(この日の大とんどは延期)
 1月15日 大倭神宮月次祭。夜7時から大倭会館で中村俊哉さんの前夜祭。
 1月16日 同じく12時から帰幽祭が行われました。お骨上げのあと、5時過ぎから五日祭。
 1月17日 午前10時半から大倭宮拝殿で大倭殖産(株)の事業関係各社の「安全祈願祭」。
 1月20日 拝殿のエレベーターの定期点検。
 午後、交流の家でFIWC定

例委員会。

1月21日 午前9時30分から西齋庭で教長さんの点火により大とんど神事。大倭神宮の枯れ竹、お正月の飾り物、祖霊祭の経木等が火に上げられました。
 1月23日 大倭大本宮月次祭。
 2月2日 教務本庁で矢追房子さんと吉澤満さんが、玉緒祭用の福豆煎りをしました。
 2月3日 玉緒祭。
 この日は昭和40年の玉緒祭法話をお聞きしました。
 2月6日 大倭神宮月次祭。夜、大倭会館で邑倭の会。
 2月9日 法主帰幽祭。午後1時40分から奥津城でご挨拶のあと拝殿で祭典が行われ、その後平成30年12月23日の日聖祭の映像を見せて頂きました。
 2月10日 午前11時から大倭会館で反保隆臣さんの一年祭が行われました。
 大倭安宿苑では

(菅原園) 1月17日 京西中学校から3日間1人が職業体験実習に。
 (須加宮寮) 2月3日 節分、昼食は海苔巻。
 (長曾根寮) 1月11日(デイサービス) お祝い膳や色々な遊びで新年会。
 1月18日(特養) 喫茶倶楽部。
 (茂毛菴園) 1月10日 「戌」で書道クラブ。
 (八重垣園) 1月18日 一人鍋で誕生会。

あんない

*月次祭(大倭神宮) 3月6日(火) 午後2時より大倭神宮にて。
 *大倭会主催第590回祝会 3月11日(日) 午後2時より大倭大本宮拝殿にて。
 *月次祭(大倭神宮) 3月15日(木) 午後2時より大倭神宮にて。
 *月次祭(大本宮) 3月23日(金) 午後2時より大倭大本宮拝殿にて。

三重県四日市市 中村 勝彦
 ◆光陰矢の如し。初めて大倭の地を踏んだのは、確か37年前。その間、何をしてきたか、というと特に大したことませず、ただ自分の都合に合わせて時々、祝会や祭典、行事に参加させていたただいただけ。簡単にいえば、そのようなことです。きっかけは『氣流の鳴る音』(真木悠介著)の中の大倭の紹介文に魅かれて真木先生の紹介で伺いました。◆その後、転職をして経済的不安、仕事上の不安などがあがり、時々、訪れては「何となく気持ち軽くなる」といったこと、暮らしたことに思ひま

この頃思ふこと

◆「言うてみれば、「生老病死」にまつわる諸々の不安。それは今も続いているものですが、結局、何が変わったのか、と考えてみると「物事への対処の仕方」でもいいでしょうか。自分自身への向き合い方。仕事への向き合い方。社会への向き合い方。自然への向き合い方。◆例えば、家族との些細な諍いに對しても、以前なら相手の誤りを見つけて、それに乗じて自分の怒りをぶつけることがよくありました。今は、一拍置くというか。一呼吸置くと、怒りが消えていくようになりました。◆自然に對しても、休みの日に畑で畝立をして肥料を施すと計画をしても、雨が降ればできない。他の用事が入れればできない。以前であれば、どうしてもやってしまわないと気が済まなかったし、他のことを犠牲にしてもやらなくては思っていました。今は、「仕方がない」「そらやな」と事態をそのまま受け入れる。その判断の基準は何か、と言われても明確な答えはありません。ただ、受け入れる。◆「他人との向き合い方」も間合いと申しませうか、空気感といひませうか。これを無理に壊してもやるべきではない場合は、無理をしない。そんな「向き合い方」に変わったといえは、変わったなあ、と。

◆今思えば、これが大倭から学んだことではないか。このような言い方は、「単なる気分」「思ひ込み」「マインドコントロール」解釈はいろいろでしょう。うまく伝わらないことを承知で言っています。実際、目に見えないものだから、外からはわからないかもしれない。しかし、私が生きていく上では、大きな財産になりました。
 ◆「遺言」(養老孟司著)の中で養老さんが言っています。現代社会の種々の問題は脳(意識)が造り出した都市化した空間にある、と。少子化やオウム真理教の問題なども都市化した空間の社会システムの中で、人間が自然との対処の仕方を忘れたために起こったことだと。◆この対処の仕方に、大倭の空気感がまだまだ有効なのではないか。現代社会を生き抜く上でも十分に役に立つ。ただ、それは秘儀でも、秘伝でもなく、日々の暮らしと大倭との出会いの中でそれぞれが感じるものではないか、と思っています。これを言葉にしてしまうと、養老孟司さんが言うように意識が暴走して横道にそれってしまう恐れがある。悩ましい問題です。
 ◆自分は日々の暮らしの中で、相変わらずばたばたしているだけですが、大倭のお蔭をいただいた者としては、大倭の空気感が、和の光となって大きな力を持つことを祈っています。